

今回の臨床解剖実習を通じて、医学を学ぶ者として大変貴重な経験をすることができました。1年次の解剖実習とは異なり、基礎医学だけでなく臨床医学も知識をある程度身につけていたことで、解剖対象に向き合うことであったため、単なる形態の理解にとどまらず、実際の治療と密着に置いた立体的な理解へと学びを深めることができました。特に動脈や静脈、神経と臓器の位置関係を、教科書的な二次元の図ではなく、実際の立体構造として再度確認できたことは、将来患者さんに接する際に、病変やその病態を考えたうえで非常に重要に感じるようになりました。血管や神経が臓器とどのように交わり合い、互いに影響を合っているのかを自分の目で確かめられたことは、頭の中で知識を整理するだけでは得られない理解につながったと思います。

特に印象的であったのは、1年次のときの学びの差です。当時は「どこにどのような臓器や筋肉があるのか」「血管や神経がどのように走行しているのか」といった基礎的な位置関係を覚えることに必死で、目の前の構造を理解することに精一杯でした。しかし今回、4年生として臨床解剖に臨むことで、単に位置を確認するだけでなく、実際の臓器の大きさや質感、さらにはそれぞれの臓器が持つ機能を踏まえて理解することができました。臨床での病態や外科的治療を具体的にイメージしやすくなったことは、1年次の解剖では得られなかった深い気づきであり、これまで積み上げてきた知識が解剖を通じて実際の医学と結びついたと強く感じました。

また、普段の学習環境では触れられない腹腔鏡を実際に操作できたことは、大変貴重な経験でした。映像を通して得られる視野は、直接視認する解剖とは異なり、限られた空間での構造把握を必要とします。その難しさを体験することで、外科医がARとどのように繊細な操作を行っているかと実感し、同時に腹腔鏡下手術の意義や限界についても理解を深めることができました。医学の進歩によって患者さんに侵襲的な治療が可能になっている一方で、術者には高度な技術と深い解剖学的知識が求められていることを身をもって学ぶことができました。この経験は臨床を学ぶうえで強いモチベーションとなりました。

さらに、座学でしか学ぶことができなかった外科的アプローチを自分の手で実践できたことは、特に印象に残っています。これまでの講義では「手術の際にはどのようなアプローチがある」と知識として理解することが多かったのですが、実際にメスを握り、皮膚から臓器に到達するまでの手順をこなすことで、外科的操作がいかほど合理的に、そして患者さんへの侵襲を最小限にするように設計されているかを体験することができました。同時に、理論的には理解していたはずの外科的アプローチも実際の組織に触れると予想以上に複雑であることを痛感しました。個々の解剖対象の臓器の硬さや血管の脆さ、神経の繊細さなど、教科書からは得られない情報を知ることで、今後臨床の現場で手術を行う際に大いに意味を持つと感じています。知識が現実の人体にどう結びつくのかを理解でき、非常に意義深い経験でした。

この実習を通じて、改めて解剖学を学べたことに、そして方々の熱いご意思に深い感謝の念を抱きました。

生前に医学教育への貢献を望んでくださり、さらに私たちにかけがえのない学びの機会を与えてくださったことを、決して忘れることはないと思っています。人の身体を教材とする以上、その背後には必ず人のほのぼのとした思いがあることを意識しておいて学ぶことの大切さを改めて実感しました。単なる知識習得にとどまらず、その思いを真摯に受け止め、臨床の現場で患者さんに還元していくことが、私たちに課せられた責務であると強く感じました。解剖室で得られた経験の一つひとつが、今後医師として成長していくうえでの大切な基盤になると確信しています。臨床解剖実習は、単なる術式やフローチャートの理解や構造理解にとどまらず、基礎医学と臨床医学を橋渡しする重要な教育機会であると実感しました。今回学んだ知識や経験を糧に、今後さらに学びを深め、患者さんに安心と信頼を伝えるような医師を目指して、日々の学習と研鑽を重ねていきたいと思っています。